

令和 2 年 5 月 24 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16930

研究課題名(和文)古代末期から初期中世期におけるキリスト教殉教概念変遷史の政治史的解明

研究課題名(英文)An political interpretation on historical transition of the Christian martyrdom concepts from late antiquity to early middle age

研究代表者

大谷 哲(Ohtani, Satoshi)

東海大学・文学部・講師

研究者番号：50637246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はローマ帝政初期のキリスト教会において形成された「殉教」の基準に存在した「法廷におけるキリスト教信仰の保持による有罪判決」という客観的規定が、古代末期から初期中世にかけて変質した過程を分析した。キリスト教徒の社会的地位の不安定化が、殉教者称号付与の基準に影響を与えた状況を描出し、かかる政治的背景から生まれた要請が、同時代のみならず、古代の殉教者にもかかわる殉教概念の変遷を引き起こし、その後の中世期から現代に至る西欧キリスト教社会のアイデンティティ形成に与えた影響を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、古代末期から初期中世のヨーロッパを分析の舞台とし、古代ローマ帝国期に初期キリスト教会内で形成された「殉教者」という概念が、その後の社会的情勢のなかで、不安定な状況におかれたキリスト教徒たちによって、個々人、個別の共同体の政治的な要請に応じて変遷する過程を分析した。自らを迫害される初期教会の殉教者と重ね合わせる自己アイデンティティ理解、歴史理解は、中世以降のヨーロッパ文化の形成に重要な影響を与えたと考えられる。本研究によって、現代社会にもつづくヨーロッパ文化の思考様式の一端的形成過程が分析されたことは今日的にも意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this project, I analyzed the transition processes of the criteria of the title of Christian martyrs from the early Church in Roman Empire to late antiquity and early middle age. In the age of the early Church, Christians held the criteria of the title of martyrs as the condemn by Roman Officials. From the late antiquity to early middle age, people changed the criteria along with their political needs in when they lapsed in insecurity in their society. I also analyzed the impacts of the change of the concept of martyrdom in the early middle age in Europe.

研究分野：初期キリスト教史

キーワード：殉教者 キリスト教 ヨーロッパ 古代末期 初期中世

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

「殉教者」とは西欧キリスト教社会における根強い崇敬対象であり、アイデンティティの根幹の一つを形成する象徴的存在である。しかし、「信仰のために死を選んだ教徒」という、当然視されてきた前提は、古代史料、特にローマ帝国期のキリスト教徒たちが残した教会史史料や書簡史料において通用しないかに思われる事例が散見された。明らかに生存中の人物に対して、「殉教者」(羅:martyr、希:μαρτύς)という言葉が用いられる例が複数発見されたのである。この矛盾は長らく未解決であったが、保坂高殿「殉教者称号の成立とローマ帝国のキリスト教政策」『宗教研究』64巻286号第3輯、1990年51頁によって示された、殉教者称号の成立は法廷におけるキリスト教信仰の保持による有罪判決という客観的規定が存在したという説によって打開された。研究代表者(大谷)はこの保坂説を受け入れ、こうした規定によって殉教者称号を得た古代のキリスト教徒たちを取り巻く政治的な動静を研究することで、これまでの研究成果を蓄積してきた。

### 2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」で先行研究者として言及した保坂高殿は3世紀以降、ローマ帝国政府の対キリスト教政策が変化し、法廷に引き出された教徒に対する有罪判決を極力引き伸ばし、棄教を促す方針をとったため、有罪判決が下されるのは当局が教徒の説得を諦めたときであり、必然的に判決は死刑のみとなり、3世紀以後「殉教者」という用語が指す意味は「信仰のために死刑となった者」と変化し、現代に至る殉教者概念が定着したと考えた。しかし、研究代表者(大谷)のこれまでの研究からは、3世紀という用語法変化期の想定を覆す史料の存在が明らかとなっている。古代末期から初期中世における「殉教」事例を記録しながらも、それぞれの事例で同時代、あるいは史料執筆期に、取り扱われた人物たちが「殉教者」称号に相応しいか否かという論争が、教会内だけでなく、時の政治権力の中枢でも生じたことが史料に記されている。これら进行分析することで、古代的な「法廷における有罪判決」という殉教者称号付与基準が被った変遷過程を解明することは本研究の目的であった。

### 3. 研究の方法

本研究は、古代末期から初期中世にかけての殉教者概念の変質を解明するため、同時期において「殉教者」の基準が論争された状況こそ殉教概念の変化過程と捉え、4世紀以後、キリスト教共同体において生じた個々の殉教事件・個別のキリスト教徒に対する殉教者称号付与を巡る同時代の論争を検討することにより、これらの諸事例が発生したキリスト教徒共同体が当時陥っていた政治的に困難な状況が、「殉教者」という西欧キリスト教社会の象徴を形成したことを解明するという方法をとった。

### 4. 研究成果

本研究の目標である、古代末期から初期中世にかけて殉教の基準が変質した過程を明らかにするためには、初期中世社会における古代の殉教の理解の実像を解明しなければならない。そこで、科研費申請時には391年アレクサンドリア修道士殉教者称号付与論争についての経過報告を行う予定であった、国際学会 Asia-Pacific Early Christian Studies Society Conferenceにて、6世紀の司教トゥールのグレゴリウスが残した教会史史料、殉教者集成史料を通じて中世期におけるローマ期史料の受容に関する研究を報告した。

上述の国際学会報告を行った研究をさらに発展させ、以下のような分析を行った。2世紀に現在のフランス・リヨンにあたるルグドゥヌムで発生したキリスト教徒迫害事件は4世紀のエウセビオスによるギリシア語『教会史』ならびに『古の殉教集成』に記録された。しかし古代から中世への殉教概念変遷を政治的に解明する本研究は今年度以下のように進められた。しかし6世紀トゥールのグレゴリウス『歴史十巻』が執筆された時代には、5世紀のルフィヌスによるラテン語訳版『教会史』の改竄的な記述と、散逸した『古の殉教集成』の断片的な情報が不完全な形で2世紀の事件が伝わり、実際には発生していない殉教の記述が混乱した内容で『歴史十巻』に書き加えられるようになった。こうした伝承過程を明らかにし、国際学術誌に発表した。

また、殉教者に関する歴史記述が生成される状況を考察するため、4世紀のパレスチナで作成されたエウセビオス『教会史』における、同時期エジプトでの目撃情報の処理についての研究をアメリカでの国際学会において報告した。

殉教者概念の変遷と殉教者称揚・崇敬とが古代末期の政治状況と密接に関連し、歴史叙述にもその影響が表れる点を、ローマ皇帝コンスタンティヌスにかかわるエウセビオスの『教会史』・『コンスタンティヌス帝の生涯』を素材に指摘し、オーストラリアでの国際学会において報告した。これらは現在、国際学会誌での論文査読、あるいは査読後の修正作業中である。

古典古代から古代末期にかけての殉教者関連史料から浮かび上がる当時の人々の宗教観念を、奥山広規・志内一興の協力を得て、一般公開講演会でのシンポジウム発表し、本研究の成果の一部から社会還元を行った。

4世紀の教会史家エウセビオスが記録した殉教記録の元資料をどのように入手したのか、想定される経路を検証することで、古代末期までの殉教記録の形成・収集の一端を明らかにした。同時に、エウセビオス自身がその殉教記録をどのように加工し、自身の歴史叙述上に配置した

のかを彼の執筆した『教会史』『パレスチナ殉教伝』を素材として検証した。その上で、エウセビオスの残した歴史書が中世ヨーロッパ社会に受容され、キリスト教化される社会の中で人々のアイデンティティ形成に活用された事例を考察するという作業を行った。

これらの研究成果のうち、特にエウセビオスの殉教記録の加工ならびにエウセビオスの残した歴史書がキリスト教化される中世ヨーロッパ社会で受容される経路については、日本における専門研究者との妥当性検証だけでなく、世界的なレベルでの専門研究者の意見を反映したいと考え、2018年9月に岡山大学で開催された初期キリスト教研究に関する国際学会で研究報告を行い、研究報告の妥当性を確認した。特にエウセビオス史書のラテン語翻訳者であるルフィヌスの研究に関して、同時代のキリスト教テキストにおけるヘブライ語 ギリシア語 ラテン語史料研究に関する各国の専門家たちからアドバイスを受けることができた。

エウセビオスによる殉教記録の加工に関しては、特に彼が活用した前時代の歴史家であるユリウス・アフリカヌスやヘゲシッポス等の史料、また新約聖書収録文書を中心に研究が進展したため、その妥当性を問うため東京大学で開催された国内学会の西洋史部会で研究報告を行った。

391年アレクサンドリアの修道士アンモニオスの殉教者称号付与論争の研究を行った。修道士アンモニオスは、市内の騒擾の中逮捕され、長官オレステスによって拷問を伴う尋問を受け死亡した。アレクサンドリア司教キュリロスは彼を殉教者と宣言しようとするが、そもそもアンモニオスの逮捕と死は長官オレステスに対する投石という暴力行為に端を発し、キリスト教信仰の故とはいえ殉教とはみなせないとする反対が生じた。本研究では、被告が判決前に死亡していることから、この事例を古代的な「有罪判決による称号付与」基準の残痕と、同時にキュリロスに見られるような基準の揺らぎが同居するケースと想定して分析を行った。これとは別に、初期キリスト教会における殉教者称号の付与によって教会内で権威を得た個々の教徒の個別分析が、エルサレム教会におけるイエスの親族の権力継承と関係することを発見し、原始エルサレム教会周辺のイエスの親族に関する史料上の叙述の真偽を問う分析も併せて進めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Satoshi Ohtani	4. 巻 13
2. 論文標題 The Persecution in Lugdunum and the Martyrdom of Irenaeus in the Eyes of Gregory of Tours	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Scrinium	6. 最初と最後の頁 213-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/18177565-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷 哲	4. 巻 新輯45
2. 論文標題 初期キリスト教における歴史とレトリック テルトゥリアヌス著『スカブラへ』	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 西洋史研究	6. 最初と最後の頁 153-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件／うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Satoshi Ohtani
2. 発表標題 Eyewitness Reports in the Eighth Book of Eusebius of Caesarea's <i>Historia Ecclesiastica</i>
3. 学会等名 Asia-Pacific Early Christian Studies Society 12th Annual Conference, Health, Well-Being, and Old Age in Early Christianity, held in Okayama University (Japan) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷哲
2. 発表標題 初期キリスト教におけるイエスの母マリア理解と教会権威 イエスの血縁指導者との関連を中心に
3. 学会等名 史学会第116回大会 西洋史部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoshi Ohtani
2. 発表標題 The Eyewitness and Translation of History in Late Antique Christianity: The Case of Eusebius and Rufinus
3. 学会等名 Pacific Partnership in Late Antiquity First Annual Meeting at Center for Hellenic Studies in UC San Diego (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷 哲
2. 発表標題 祈りと呪詛の間でーキリスト教ローマ時代と信徒たちの呪い
3. 学会等名 東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会『古代ローマにおける呪詛・呪文 裏の精神史 』（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satoshi Ohtani
2. 発表標題 Philanthropia as a Result of Conflicts: A deliberate terminology in Late Antique Christianity
3. 学会等名 Asia-Pacific Early Christian Studies Society Annual Conference: Early Christian Responses to Conflict (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷 哲
2. 発表標題 カエサレアのエウセビオス『教会史』8巻における目撃情報
3. 学会等名 第66回日本西洋史学会大会自由論題古代史部会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Satoshi Ohtani
2. 発表標題 The Persecution at Lyon and the Martyrdom of Irenaeus in the Eyes of Gregory of Tours
3. 学会等名 Asia-Pacific Early Christian Studies Society 10th Annual Conference: Survival of Early Christian Tradition (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大谷 哲
2. 発表標題 光は東方より,そして消えない輝き 中世キリスト教世界の多様な広がり
3. 学会等名 東洋大学国際哲学研究センター ワークショップ「西洋中世の見/魅せ方」
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 ロバート・ルイス・ウィルケン著 大谷哲・小坂俊介・津田拓郎・青柳寛俊訳	4. 発行年 2016年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 312 (9-79, 92-122, 143-189, 289-307)
3. 書名 キリスト教一千年史:地域とテーマで読む(上)	

1. 著者名 ロバート・ルイス・ウィルケン著 大谷哲・小坂俊介・津田拓郎・青柳寛俊訳	4. 発行年 2016年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 304 (9-121, 254-261)
3. 書名 キリスト教一千年史:地域とテーマで読む(下)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----